名古屋学院大学論集　社会科学篇　第44巻　第3号（2008年1月）

アブラハム・タッカーの道徳哲学

――自由意志について(1)――

大　村　照　夫

目　次

はじめに
Ⅰ　自由と力
Ⅱ　自由と心

はじめに

タッカーの自由意志に関する形而上学は,『自然の光明』（1768年）の中からの抜粋という形で，早くも1763年に出版されたと言われている。現存するパンフレットは見当たらないが，彼が自由意志という概念に重要な関心を寄せていたことは確かである。自由意志に関する章は『自然の光明』第2巻第3部に26章として多大な紙面が割かれている。おそらくタッカーが『自然の光明』の出版に先立って『自由意志』というパンフレットを出版したその内容はこの部分であろう。彼の執筆活動に関する思い入れや意図が自由意志から始まったと言っても過言ではなかろう。それで本論では,『自由意志』の章を紹介し，彼の神学的功利主義の原点をその中に探してみたり。おそらく人間の幸福を促進する功利の原理の原点は人間の自由な行動原理にあり，タッカーはまず人間の行為の強制からの解放を説くのである。

Ⅰ　自由と力

「さて我々の旅の最も入り組んだ部分に到着したことを見て下さい。そこは手に負えない荒野で迷路に惑わされ誤りに困らせられており，多くの強力な力が失われ，多くの聡明な方法が道を失ってしまっている。というのは，日陰や雲や暗がりが道を覆っているからである。あるいは閃光が時折り発生し，真実の概念を正反対の方向に提供し，うねる小道は失意に満ちた旅行者を彼が出発した場所に次々と導き，あるいはプロテスタントもカトリック教徒も，牧師も哲学者も出口を見出せない困難に旅行者を巻き込む。これはミルトンの神聖な瞑想が，悪魔によっても克服できないものと言われる。

この危険な道には詩人よりもよりよい理由で我々の助けよりも優れた力を求めることが許されている。しかし我々はミューズや精神や神に何を祈願すべきなのか？　というのは，ここでは個人的な処理は道徳的な目で見ることができるからである。リーサス（猿）の夢は死の睡眠によって中止され，我々の手の及ばないところにある自然の秘密は発見されない。我々は地球の内部に飛び込む必要はないし，惑星のダンスに交わる必要はないし，その組織の全ての奇妙な糸を見出すために人間の骨格を精査する必要はない。しかし我々の仕事は各人のそして毎日の経験に親しんだ通常の生活行為にある。我々は次のことが知りたいだけである。つまり，外

的対象物によって示唆される動機に基づいて彼の選択をなす人が自由に行動できるかどうか，また彼が前もって隣人が行おうとすることを知ることができるかどうか，あるいは彼の自由を侵害することなく確かに説得されて特定の行動様式にならう動機を提供するかどうか，を。考えられる疑問は議論の余地がない。これらの疑問は，通常では考えられない洗練さを備えた人々が抽象によって彼らに属する不自然な意味にそれらの疑問を紡ぎ，言葉の不正確性によって混乱を彼らの考えの中に導入するまで，通常の理解力で認められない。したがってこの論題において，我々は事物よりも言葉をもっと利用しなければならないし，考察される事実をつきとめる際の困難は，真実を語る際に利用される表現の適切な導入によって見出されない。

そこで真面目な言語学の力を借りよう。つまり，この学問は，科学の通路に道を用意するための難解な科学の先駆者である。難解な科学につかまらないで言い抜けの制動装置やいばらの山をくぐり抜けるように，体にぴったりした皮製のジャケットを着なさい。言葉のわずかな違いを図取りできるように先の尖った鉛筆を貸して下さい。同じ言葉の中に前後に動く概念のわずかな変化を確かめるために，概念が違う言い回しにおいてその立場を変えるので，顕微鏡で私を助けて下さい。

もし誰かがあなたの案内で私が旅することを許してくれれば，アテネ人やサモスの賢人を訪ね，乗り物に乗った驚きや現世の魂の限りなき賛美を見るために，ペガサスにまたがり太陽や星のすばやい光線の間を飛び回る以上に他方面に向かう歓待を彼に捜させよう。

というのは，なんじ，女神はミューズや天才たちと付き合わないからである。想像上の飛行はなんじを脅かすからである。数字や飾りはなんじの嫌悪するものである。というのは，それらはなんじが別々に保とうとする概念を奔放な集合物に混ぜ合わせるからである。全ての花列車の同様な事例だけ，なんじはなんじの気取った足跡に輝きを放ち，それらの特徴を緊張した目で容易に識別できるようにすることを許される。しかし勤勉と良心的な厳正さはなんじの変わらぬ伴侶である。労働と用心深さはなんじの喜びである。刺と茨はなんじの庭のお気に入りの植物である。そこでなんじに同伴することに同意する人は誰でも労苦や注意のために準備しなければならない。彼はなんじが彼を導く道を正確に観察し，両手で全ての出口を示し，別の分岐点に入る危険を冒す前に全体の道を再度通らねばならない。彼は似たような別の小道を通らないように道に関する完全な知識を記憶に留めるだろう。

しかし女神よ，我々はどんな道を通って荒野に入るのか？　なんじの整然とした慎慮は次のことを示さないだろうか？　つまり，あらゆる質問において我々は問題が提案された用語をまず正確に知らねばならない。そこで我々は，どこで自由の適切な意味を確かめることによってよりも行動の自由の研究をうまく始めることができるのか？」(1)

タッカーは人間行動の議論の末に自由という用語に辿り着く。その道程では刺や茨がつきささり，誤解を生むまやかしの装飾品や御馳走が並んでいる。賢人は偽物と本物を見分け，迷路を避け正しい道を選ぶ。そこで発見する真実は自由な行動パターンであり，人は自由に行動してこそ幸福を手に入れることができる。この認識がタッカーの哲学の出発点であり，人間行動を阻止するどのような障害も排除しなければ人間の幸福は増加しない。人間は自由に動き回ることによってはじめて人間らしい生活を送るこ

とができる。自由な人間行動を妨げる社会制度や悪習は人間の幸福につながる社会生活を阻害すると考えられる。タッカーにとって不自由は不幸と同義語である。

「２．ロック氏が言うには,自由は力である。意志も力である。したがってそれらの用語はお互いに断定できない。というのは，それが力を持っているといっても力について断言するのは馬鹿げているからである。しかし巨匠の権威に従えば，自由が彼が形成したよりも複雑な用語として理解される。自由は力の概念を含むが，それはその他にも他の概念を含む。そこで自由は抑制や強制力の否定のみを意味する否定的用語と理解されるので，というのは，人が自由であるという時彼が心に懐くものを実行したりさし控えることを邪魔しないだけであるので，いかに抑制や強制力の概念によって我々が行動するかを考察することが便宜であろう。

我々は数々の行動力を持っている。歩いたり話したり，考えたりできる。その力を放っておいてより。病気や他の事故は時には我々の力を奪う。そこで我々はもはや力の機能を達成できない。しかし他の時には我々は力全体を保持しているが，力を妨害するより強いもののために力を行使できない。かくて蓄えのある人は歩く力を失わない。彼の筋肉の元気さは弱まらないし，彼は以前よりも徒歩による旅の疲れに耐えられる。それにもかかわらず彼は全く歩くことができない。というのは森の茂みが彼の足の動きを止めるからである。したがって彼は自然が与えてくれた力の行使を阻止されるという抑制状態にある。かくて彼は自分自身よりもより強い別のものに押されると，彼の意志にかかわらず前に進むにちがいない。彼は手足を動かしたり休めたりする自然的支配力を失ってはいない。しかし彼は抵抗できるよりも大きい力の下にあるからである。

かくて抑制はある力とその適切な機会の遂行を阻止する妨げとの比較である。というのは，強制力は自制心の力と行動を必要とする外的衝動との同様な比較であるからである。しかし自制心は実行不能である。自由は他の二つのものの不在を示す。というのは，人が自由であると公言する場合，彼にしたくないことをさせるのではなく，彼がやりたいことを抑制することでもないと理解されるからである。かくて抑制と強制力と自由の三つの概念は全て力の概念を含む。それらの概念のいずれもどちらかが存在しないところでは存続しえない。というのは，刑務所の壁は麻痺患者には何の抑制にもならないからである。刑務所の錠を開けても彼に自由を与えることはないだろうし，人を飛ばすこともできないし，馬を喋らせることもできない。

さらに次のことが見られる。つまり，自由は力と同じものではないし，自由は力の喪失によって回復され，力の取得によって減少する。12ヶ月の間ロンドンから出てはならないという議会の法律が施行されると，それは私の自由に対する耐えがたい抑制である。しかし痛風や中風によって，つまりその期間に取り除くことができない他の不満によって外国を動き回ることができない。その制限はもはや私には制限ではない。私はあたかもその法令が制定されなかったように自由を維持できる。他方我々の洋服は体に合うように作られる。我々が包み込まれる多くの縛り糸や覆いにもかかわらず，我々の全ての手足を自由に動かせるように。しかし一組の翼が我々の側面から生えて神を喜ばせるならば,我々の洋服はやっかいな抑制物となる。我々は新しい力の付加によって失った自由を回復するために，洋服屋に頼んで翼を広げるために，洋服に切り口を入れなければならない。

そこで自由は力に適用できるので，それは他の何事にも適用できない。力が自由であるかどうかを尋ねるのは馬鹿げた質問である。というのは，それはそのような力が力の行使を強いたり妨げる強制力や障害に関してどのような状況に置かれているかを究明することのみを意味するからである。そのような質問をその行為者に適用する場合，質問は彼が保持するある力に常に関与している。したがって人は行為に関する様々な力に関して自由であり同時に抑止される。というのは，部屋に閉じ込められている人は外国へ行けないが，自由に考えたり話したりできるからである。しかし特定の行為を行う力は抑制されている間は自由ではありえないし，逆ではない。我々は障害に打ち勝つことができないようなものではないが，障害が我々を妨害する場合のように，実際に部分的な抑制と両立する自由度があるが，むしろ抑制を意味する。というのは，軽い靴のように自由にまた機敏ではないが，重たい長靴を履く人はなお歩けるからである。そのような障害は我々に力の行使を禁じないが，その使用を困難にまた骨の折れるものにしたり，力の及ぶ範囲を限定する。」(2)

自由は人間行動の出発点であるが自由である前にまず人間自身に自ら動きうる力が必要である。読書するにも歩くにもエネルギーが要求される。本人が痛風や中風で動けない時にはいくら自由でも歩くことができない。しかし彼は歩けないが考えたり音楽を聞くことはできる。人は自らの力の蓄積量によって行動範囲が限定される。

しかしロンドンを出てはいけないという法律が制定されると力のある人はロンドンを出ようとしても出られない。自由に対して抑制力が強いのである。ところが中風の人にとつてはその法律は全く効力が無い。彼は法律があろうがなかろうが，ロンドンを出られない。

「３．不注意な旅行者を迷わす疑わしい出口を見分けるために我々が歩いてきた道に目を向けよう。ロック氏が言うには，我々は力に関する概念を実質的に互いによって形成された変化から，得る。したがって力という言葉は，本来そして適切にそれらの変化を引き起こすものにおける質や特性を示し，能力と同義である。我々はこれまで力をその意味に用いた。しかしそれはしばしばより大きい意味を伝え，能力の他に他の状況を包含する。かくて力を置いて見る様々な光に従えば，人は力を持たない場合に力を持つことができる。つまり，彼は力を別の機会に持ちたい間ある意味で力を持つことができる。

全く健康で元気な人がベッドに多数の糸によって巻きつけ寝かされると想像しよう。別の人は彼が動かなくて横たわっているのを見る。しかしその出来事を知らないので，彼が手足の働きを奪われた突然の病気に襲われたと想像する。彼は全ての行動力をたちどころに奪われた不幸な状況を嘆く。我々はこの誤解された不平を言い渡してはならないのか？　というのは，その人はどんな力も失っていないからである。しかし彼は彼を縛って寝かせる紐が解かれるまで力を使用できないが，その力は全てこれまで通り維持されている。第二の人がその部屋に入り，その事情を別の意味にとり，彼の不活発さを責められる怠惰の発作に帰するならば，彼の言い訳を弁護すべきでないのか？　つまり，彼が起き上がらないのは彼の欠陥のせいではない。というのは，きつく包帯に包まれて横たわり，手足を少しも動かす力がないのであるから。

かくて我々は次のように見ている。つまり，力は，問題が提案された方法やそれを提案した

人の思考に従って，同じ状況の中で確認されたり否定されたりする。そこで人は仕事を遂行するために十分な能力を持っている。彼はその仕事を，ある障害，道具や材料の不足，あるいは途上にある他の状況のために，実行できない。

ロック氏は，力を自由と同じ概念と考える時，力をこの広い範囲で理解したと思われる。というのは，もし自然的能力について語るならば，刑務所の南側にいる人は南側ではなく北側へ歩く力を持っているところでは，これは正しくないからである。というのは，彼を一方に運ぶ同じ手足の元気さは彼を別方向に運ぶのに十分であるからである。したがってもし彼が北方向に歩く力を望むなら，囚人を囲む壁は彼の通行を妨げるので，その用語は自由を含むように解釈されなければならない。この意味で力は，青色は青であるかどうか，あるいは固さは固いかどうかというように，自由であるかどうかと尋ねるのは馬鹿げている。」(3)

ロック氏の言うように自由は力であり能力である。タッカーはベッドに紐で縛られ横たわる人の事例を出して，彼が自由かどうかを検証する。もし彼が元気であれば不自由であるが，第三者から見ると自由なのか不自由なのかわからない。彼が突然の発作によって動けないのであれば，紐を解いても彼は動くことができないから自由であろう。

あるいは刑務所の塀は囚人の行動を制限している。囚人は塀を越えたくても越えられない。塀という障害物は人の行動を制限する。囚人は塀によって行動の自由を奪われているために自己の能力を発揮できない。

「4．さらに次のことが注目される。つまり，知識はしばしば力と混同される。というのは，典型的なものは，我々を指図して適切な行為を選択させる必要性を引き起こすので，能力無く実行できるのではなく適切な行為無く事を進めることができるだけであるからである。もし文書を即座に作製するようにせきたてられる際に論文を間違った場所に保管していると，次のように主張しがちである。つまり，論文を書くことは私の力の及ばないところにある。というのは，論文が入っている引き出しの鍵を持っていないからではなく，他の論文と同様にその論文を取り出す手の力が無い訳でもなく，論文を探す場所がわからないからである。そこでもし田舎者が町のはずれに住む人と話したいなら，その家を見つける力がないと言うだろう。市民を導く全ての分岐点を通って彼を運ぶ彼の関節のしなやかさを望めない。というのは，彼は正しい道を知らないので道に迷うからである。しかしこの考え方は自由に関する議論に入っていけない。というのは，無知は自由の剥奪というよりも力の欠如と見なされるからである。

第1巻，第2章（行動）において次のように言われた。つまり，一般に行動と呼ばれるものは単独の行動ではなく，一連の多くの行動である，と。そこで物事を行おうとする場合，二，三の中間の段階を経て事物の達成を進める。その段階の各々はそれを遂行する特定の力の行使を必要とする。さてもしその過程のどこかで障害がたちはだかると，提案された物事を行うことができない。しかし障害がこちら側に横たわっていても歩みを進める自由を維持しているが，歩みがいかに効果がないことがわかっても，とにかく我々の努力を活用できる。かくて道路が洪水で溢れロンドンに行けなくなると，何の邪魔物もなく洪水の端にまでは行けるだろう。もし彼が部屋に閉じ込められると，扉を押し開けようとする。もし彼の指が包みの糸で絡まると，手を広げようとし，指を伸ばすために筋肉をふ

くらませる自由がある。

同様に次のことが見られる。つまり，抑制はしばしば無気力と混同され，容易に混同を避けることができない。というのは，抑制は我々の力と力の行使を邪魔する物との比較であり，力の増加とともに止み，我々の力の減少とともに生じるから，我々の動作に対する障害は以前にはなかったと伝えられるからである。かくてサムソン（力持ちの師士）は彼の力を剥ぎ取られ，以前に自由の侵害とはならなかった同じ縄によって監禁された。もし縄が彼の髪の毛が再び伸びるまで彼を拘束するならば，縛帯の力の変化も無く彼の力の回復によって自由を回復しただろう。

したがって，我々は事例を照らす光に従って力や自由が不足する同様な事例について，次のような意見を述べる。つまり，教会の土地の譲渡を禁止する法律は時には無能力にし，時には防止する法令と呼ばれる。そこで我々は，病気のため外国に行けないかあるいは家に閉じ込もっている人について公平に語る。しかし厳密には最初の発熱は無能力を引き起こさない。というのは，一般に通常ではない力と精神の働きがあるからである。そこで病人は，外出を妨げる障害である病気に対する必要な配慮がなければ，健康な時と同じ行動をとるだろう。ところが実際は麻痺状態の人も適切には閉じ込められない。というのは，態度や精神の働きは健全であるからである。何ごともあなたが外国へ行くことを妨げないが，あなたの手足の使用は病気によって中断しているので，あなたは行けない。

ロック氏は次のように言っている。つまり，活動的力は精神にのみ属する。これがどのようなものであれ，確かに力を認識する。我々の通常の会話においては力が意識のない物事に存すると言われる。したがって，何事もそれらの機能を妨げない場合自由を行使するので，それらの自然的属性から期待するものと違う方法でそれらが活動的であったり行動的であるとわかる時，それらの用語に強制と抑制という言葉を適用する。我々は自由な空気や揺れる振り子や自由に流れる川について話す。そこではそれらの動きを阻止する障害がない。水はエンジンによって押し上げられたり，水の流れは土手を盛り上げた運河に閉じ込められる。

かくて，次のようなことになる。つまり，自然主義者が本質に帰する不活発という力（force），およびそれとは違って運動や休息からその状態の変化を引き起こす衝動という力（force）は通俗の言葉で力と同じ意味を正確に伝えてくれない。というのは，これは一度受けた運動におけるそれ自身の不活発性や固執とともに，激しく海に突入する重力という衝動であるからである。しかし普通の人は皆，水が何か他の力で上に押し上げられていくのを見る場合でなければ，また何かが水が自然に流れる道を妨げる場合でなければ，水がひとりでに下に流れると理解しており，水が力（force）の下に置かれているとは考えない。しばしば急流の力（force）について話しているが，水が置かれている力を理解しないで流れの過程にあるどんなものも利用できると考える。

人間の言葉を調べる人は誰でも，反対のことをどんなによく知っていても，また表現を自発的行為者や行為者自身の行動力としてどんなによく知っていても，我々が言葉づかいを正しく我々自身の行動様式に属する体に適用していることがわかる。かくて風はそれが起きるところで吹くと言われる。水は油と混ざらないと言われ，水は熱い気化を引き起こすが，最大限の圧力によって濃縮に耐えるよりもむしろ金の気孔を通り抜けると言われる。人間の行為に共通す

る選択，同意，決心を表わす用語がある。

学者が体に関する傾向，輝き，骨折りと時計仕掛けの自然なあるいは自動的な運動や事物の法則について語る場合，彼らは同様な誤用を止めようとしない。そして彼らが構成要素から生じる派生的な属性から抽象する場合でさえ，休息を体の自然的状態や選択とみなす。体は自らを保存する力を行使する。体内における運動量を呼び集めることによって力を集めることができる。その力は抵抗しがたい衝動によって彼の性向に反して押し進められる人の運動に似た概念を伝える。」(4)

人間の行動は自由と力によって支えられているが，そこに精神の働きを無視できない。いかに自由であっても行動する意志が無ければ行動する能力があっても行動できない。怠惰な人は自由と力があっても毎日無為に過ごす。病人は能力が無いために自由と意志があっても体が動かない。健全な人でも行く手を洪水や大きな岩によって妨げられると，歩く力はあっても自由に前に進めない。

人間行動を抑制する様々な障害を障害として認識する努力が必要である。水は自然に上から下へ流れるのではない。重力の働きによって水は下へ流れるのである。ポンプは重力にさからって水を上へ押し上げ，土手は水の流れを止める。

「５．私はこれらの正確なものに注目するが現在の疑問に答える利益はない。言葉の変化を妨害することに対する注意は我々を迷わせる。自由の適切で本当の意義は，我々が保持するあらゆる力の行使において我々を妨げる全ての障害のないことであるので，我々の力を利用する際に力が発揮される場合，我々は自由である。しかし抑制の下にある何かが我々の力の行使において我々を阻止する場合である。かくて我々が力を行使してもその行使の適切な結果は生じない。

かくて，もし足を使う際に両足が彼がめざす場所に彼を運ぶなら，人は自由に歩く。しかしその途中に壁や棒があれば，精一杯努力しても前に進めない。その場合彼は自由ではない。そこで，全ての行動において遂行する能力を持っているが，もし行動が我々の努力に続いて起こらないならば，それは運動の効果を妨げる障害物のせいであるにちがいない。

このため，自由は努力の結果にかかわるものであり，努力の原因にかかわるものではない。というのは，歩こうとする誘因が私を説き伏せようとしまいと，もしその気になり歩きを妨げるものが何も無ければ，同様に自由であるからである。というのは，自由は力の行使に先立つものに依存しなく，力を行使した後にその過程で存在するものやしないものに依存するからである。そのため自由は歩こうとする先立つ原因や神の傾向と一致する。というのは，何らかの誘因で部屋を出ることをどんなに強いられても，ドアに鍵がかかっていれば自由に力を発揮できないからである。いかに様々な誘因が力の利用を引き止めても，ドアが開いていると自由である。

それは行動の自由にのみ関係し，これに関し論争はないが，意志の自由に関係しないから，この全てのことは正しいが考察中の事例に影響を与えないといわれる。というのは，アルミニウス派の人は誰も目的地で黙らせられても自由を妨げられたとは思わないし，最も厳格なカルビン教徒は束縛が無くなると好きな道を自由に進めるということを否定しないからである。それで論争は意のままに行動する自由に基づいて変わるのではなく，力における二，三の行動から選ぶ自由に基づいて変わる。そこで両者は次

のことに同意すると思われる。つまり，神の計画に含まれるどのような行為も遂行されなければならないし，もしやろうと思えば反対のことをできない。」(5)

人間行動は彼の力の行使を必要とするが，力の発揮が思いのままになされる環境が自由の別の表現でもある。人は歩く力を持っているから前へ進む。しかし前方に壁があれば前へ進めない。自由は壁を取り除き，前へ進もうとする人の行動を促す。これが神の摂理であり計画である。神は人間の自由な行動を願う存在である。タッカーは自由を神の計画と考え，これを阻害する社会的要因を取り除こうとする。

Ⅱ　自由と心

「6．この問題に関する議論に入る前にその問題を提案する際に我々自身を理解する必要がある。というのは，人は，意志という用語がその文章のいずれの分野にも現われるので，その考え方は必ずしも明確ではないと思われるからである。

ロック氏の権威に基づいて次のことを知る。つまり，ただちに意志決定でき，人間の心の動きを観察する人は誰でも，心の意志行為が一時的でつかの間であることを見出すだろう。心はその行動を絶えまなく変化させ，この瞬間に心が次に拒否するものが喜ばれる。もし心がある目的のためにしばらく我慢するならば，それは同様なそして相当であるが，数字的に明白な意志行為によるものである。したがって，もしこの現在の一瞬間を我慢しようとすれば，我慢できるかどうかを尋ねることは，役に立たない，またとるに足りない質問である。それはその通りだと答えられるにちがいなく，同様な性質のあらゆる他のものであるにちがいない。というのは，もし歩けば歩けるし，馬に乗れば乗れるし，あるいは，そうすればあなたが名付けうる他の全てのことをすることができるからである。そこで仮説に基づいた確言は，明確に提案されると絶対的に不可能な物事に関して真実である。というのは，次のことが正しいからである。つまり，ピンをつまみ上げればつまみ上げることができるように，家を持ち上げれば家を持ち上げることができ，月を飛び越えれば月を飛び越えることができる。そのような前提は，全く同一であるだけでなく深淵な内容を見せるが，我々の情報に何も付け加えてくれない。

したがって，何かを意味する質問は異なる時間や異なる意志に関係しているにちがいない。その質問の成行きは次のものを尋ねることである。つまり，やがてある事を実行するために意志によってそれを自ら引き起こしうるかどうか，あるいは高価な装身具を買いかつ節約するというように同時に反対のことを実行するならば，一つの意志で他の意志を支配できるかどうか，あるいは第三の意志で行為の指針となる二つの意志のいずれかを選ぶかどうか。これらの研究の第一のものに対しては直接的な解答を与えることができない。前もって実行しようとすることに基づいて決定し，たびたびそれに従って実行するが，他の時は行わないし，これは二つの理由に基づいているということが毎日の経験によってあきらかである。というのは，我々は心変わりしたからであり，あるいは同じ行動を続けてもある種の願望や恐怖や困難を見出し，我々の決心のために余りに強力に立ち上がるからである。しかし心の変化は自由に関する疑いを生じさせない。というのは，誰も次のように想像しないからである。つまり，物事に対する我々の決心は，それを実行する必要性の下に我々を置く良き理由が反対に生じたり，我々

の判断が変化する。あるいは，誰も次のことを否定しないからである。つまり，これから7日間ロンドンを離れようといかに固く決心しても，その間に適切であると思う時はいつでも他の事を決定する自由を完全に保持している。

ついでながらこのことは自由が前の原因と一致していることを示す。というのは，何ごとも私がその行為を省略する以外に妨げないならば，私が前もってある事を決心したのでそれを実行し，我々が毎日の生活でこれを実行するならば，我々がそれを遂行する意志行為は私の前の決定の結果として認められるにちがいないが，各人の評価において自由な行為として説明されるだろうからである。したがって，私の最初の決心が神の計画の中に含まれるならば，その実行は私の自由の侵害無くその計画の一部を形成する。というのは，抵抗できない優雅さや超自然的衝動によって影響され決心すると想定すると，神の計画の一部をなす際に自由ではないが，決心を変えないことに自由であり，私の判断や判断を上回る誘惑を変える全ての示唆を避ける必要はないからである。そこで私は，私とともに保持する自由のお陰で決心したものを実行する。

しかし我々の心を変えることなく我々の行為を変更したり，反対の方向へ向く欲望のために我々の意図するものを中断する場合，議論や困難が生じる。というのは，我々の意志が依然として働くと考えるからである。しかし，優勢な力やその力を妨害する障害によって効力を阻止される。このことは自由の不足に関する本当の考え方を提供する。

かくて，この問題，つまり現在の意志によって将来我々が実行しようとすることを決定できるかどうかということは，他の問題，つまり一つの意志がもう一つの同時に存在する意志を支配したり限定できるかどうかということに帰する。」(6)

人間行動は力の行使によるものであるが，力の行使を決定する意志の働きを見逃すことができない。意志決定が自由に任され何の抑制や強制も働かないところでは，やろうという意志とやめようという意志が葛藤し，両者の意志を仲裁する第三の意志の存在が必要になる。しかし最初の決心が神の計画の中に存在するならば，行為の選択は自由の侵害なく神の計画は実行される。人間の意志行為が神の計画と一致する時に計画は実行され人間行為は人々の自由を保証しかつ人間生活を快適なものにする。タッカーは人間行為が神の計画の一部であるという発想の中に神学的功利主義思想の端緒を見出したといえる。

「7．そこで形而上学的に疑問を検証する場合，疑いもなく困った問題を見出す。その疑問にかかわる用語は形而上学の語彙の中には無い。というのは，哲学的及び通俗的言葉が存在するからである。もし勉強好きな人が通俗的考え方の中に抽象性を交ぜようとすると，迷路や暗闇の中で当惑させられるにちがいない。

意志の多様性に関する概念は，人間の心の動きを注意深く研究する人には知られていない。というのは，心の行動は即時的であり一時的であり，心は同時に一つ以上のことを達成できないからである。我々は様々な行動力を持っている。その力は全て力を特定の対象に向けるために心の支配下におかれている。心が力を向けさせることは，適切には意志行為である。風が東西に吹くように心が反対の意志行為を同時に行使するということを想像するのは馬鹿げている。

我々は力の行使において抑制されている。というのは，力の施行は二，三の段階を経ている

からである。我々は未知の神経に基づいて行動する。神経は筋肉を膨張させ，筋肉は腱を引っぱり，腱は手足を動かす。もしどこかに障害があれば，いかに我々が行動に努力しようと意図された行為を遂行する自由はない。しかし心の衝動を最初に受ける肉体の繊維に基づく心の行為は即座のものである。そこで行為の進行を止める際にこれを妨害する障害に対する余地はないからである。我々は心が動かなくなる繊維によって，あるいは心の手の届くところから離れることによって心の力を失うと想像できる。しかし力が無くなると自由や抑制のための場所がないということがわかる。

心が心自身の行為を自由に決定するかどうかということは問わなくてよい。というのは，これは，一つの意志行為がもう一つの意志行為の結果であるということを意味するからである。そこで意志行為は離れて存在する。しかし我々は，心が動機の仲介によらなければ心自身に基づいて行動しないということを前の場所で示した。というのは，我々が判断の動機や性向や現在の愛好によって入り込まない生活上の行為はないからである。そこで我々の活動的な力の他に随意の力を持っているとしても，いかにその力が後者の力を決定しようと，それは選択において理解される満足によって決定されるにちがいない。

しかし，もし何かが動機を呼びさます努力にもかかわらず動機の出現を妨げるならば，我々の思考に対する動機の示唆は，我々の手足の動きのような行為である。我々はその行為に関して自由であるか抑制されるかもしれない。しかし，我々の最初の努力に関して他の事例においてできないと同じように一方の事例においてもできない。

したがって，哲学的意味においてとらえると，正直が徳に対して適用できたり速やかさが睡眠に対して適用できるように自由を意志行為に適用できないと公言することにおいてロック氏に同意する。」(7)

心の中で力をある目的に向かわせるものは意志である。意志が行為と結合するところに意志行為が発生する。

意志行為は心の衝動であり，それは神経を経て筋肉や腱を動かす。心の衝動は人間の満足を求める動機によって引き起こされる。次々と心に湧く欲求は人間を様々な行動に駆り立てる。心の働きは行為に何ら抑制や強制が働かなければ完全に自由である。

「８．しかし，人間に関する通常の講話を聞くならば，その話が二，三の意志や互いに抵抗する，打消す，支配する同一人物における二，三の作因について語るのを見出す。だから，精神的そして物欲の意志に関する，人間と野獣に関する，わがままと理性に関する，我々の意志を否定し我々の欲情に打ち勝ったり，とりこになったり，不本意に意志に反して行動したり，同様なことに関する通常の表現である。全てのことは結果に対する原因の換喩から生じる。というのは，我々の行動が判断の決定や欲望の懇願によって常に決定されるので，我々はそれらを意志自身と誤解するからである。それらがそれとともに直接関係していることがわかり，目ではそれらを区別できないということが，動機によって動かされる意志の小さな確認とはならない。

真面目な気分で考え，後に行為の限度を選ぶ際に，そのような決定を我々の意志として尊重する。計画が完成しないならば，あるいは新たな理由がその計画を変更するように出現しないならば，このことは一時的な行為とは考えられなく，機会が提供すると時おり努力する長く続

く力と考えられる。

しかし，しばしば次のようなことになる。つまり，過度な欲情や常習的な習慣は我々のやり方に逆らってやって来たり，我々の計画を変更することなくその実行から我々を逸す。そそのかされて行う行為がなお我々自身の行為であるということがわかるので，同様に我々はこれを我々の意志とみなす。同様な欲望が異なる時に我々を促すのを見出すので，我々は次のことがわかる。つまり，これがまた我々に内在する出現する適切な対象に行使される用意のある永遠の力である，と。かくて互いに反対し，妨げ，抑える二つの意志に関する考え方を得る。

時々それらの間の争いが続いて起こる。心が結局どちらかの側に決定しなければ，心はしばらくの間不安定にさまよう。だから第三の意志という考え方が生じ，他の二者を決着させる。これは我々の活動的な力の他に随意の力に関する概念を生じさせると思われる。

しかしこれらの争いは我々の動機における強度の変動のせいである。それらの動機の一つの勝利は，他の動機から離れて満足の概念を手に入れる。というのは，次のことがよく知られているからである。つまり，欲情と理性の動機は必ずしも同色では現れなく，同じ力で重くのしかかることはないが，度々のそして突然の変化を伴って次々と熱心にあるいは弱々しく駆り立てる。二つの行為の方策や二つの気晴らしの間で最も冷静な思考の中で同様なためらいを認識する。誰でも最良のあるいは最高の楽しみとわかるものは何でも引き出したいから，そこでは心はどちらを選ぶか感じることができない。しかし，判断や愛好のバランスが結局判断をどちらかに下す意志の干渉無く決定しなければ，両者の考え方は交互に現れる。」[8]

心の中で意志は二つの行為を選択する。散歩の際に道が二つに分かれている場合，右に行くべきか左に行くべきか悩む。心の判断は二つの道の距離や起伏を計算する。あるいは散歩を取り止めて引き返すこともあるであろう。

右の道を進む意志と左の道を進む意志が心の中でぶつかり合う。心は一つのことしか決定できないから心の葛藤はすさまじい。右へ進む意志と左へ進む意志と，時には引き返す意志がぶつかり合い三つ巴の戦いが繰り広げられる。

散歩の主人公は悩みに悩んだ末，財布から1ペニーを取り出しこれを空中に放り上げ掌に受ける。そしてコインの表が出れば右へ進む。

注

(1) Abraham Tucker, *The Light of Nature,* Vol. II, Part III, T. Payne, 1768, pp. 138–41.

(2) *Ibid.,* pp. 141–5.
ロック氏は次のように言っている。
「それゆえ，自由の観念は，行動者のうちにある力能，すなわち特定の行動を行なうのと抑止するのとのどちらかを他方より選択する心の決定ないし思惟にしたがって，この行動を行なったり抑止したりする力能の観念である。行動を行なうか抑止するかのどちらかが行動者の力能になくて，その有意にしたがって産み出されないとき，行動者は自由でない。この行動者は必然性のもとにある。それゆえ，思惟がなく，有意がなく，意志がないところには，自由はあるはずがない。が，自由のないところにも思惟はあるかもしれず，意志はあるかもしれず，有意はあるかもしれない。」John Locke, *An Essay concerning Human Understanding,* Vol. I, Dover Publications, 1959, p. 316, 大槻春彦訳『人間知性論』（世界の名著第27巻）中央公論社，昭和43年，112ページ。

(3) *Ibid.,* pp. 145–7.

(4) *Ibid.,* pp. 147–52.

(5) *Ibid.,* pp. 152–4.

(6) *Ibid.,* pp. 154–7.

(7) *Ibid.,* pp. 157–60.

(8) *Ibid.,* pp. 160–2.